



静岡県農業経営士協会の花き部会長も務める遠藤さん

トルコギキョウ

コロナ禍 苦境乗り越えて 静岡市 遠藤 弥宏さん

優れた技術で経営再興 高圧ナトリウムランプ使い花芽の枯死防ぐ

「今年の市場価格は過去5年平均と比べて下回る月はなく、120%の月もあった。質の高い花をしっかりと栽培したい」と話すのは、静岡市葵区有永町でトルコギキョウ30アをハウスで栽培する遠藤弥宏さん(64)。高圧ナトリウムランプを使用して天候不良時も花芽の枯死(ブラスチング)を防ぎ、切り花の安定出荷を実現。生産組合の中心メンバーとして、市場の信頼確保に貢献している。昨年は新型コロナウイルスの影響によるイベント中止などから収入が減少したが、今年はイベントも徐々に再開し、売り上げも持ち直し傾向だ。

遠藤さんは、妻と30代の長男、母の4人で作業する。三つの作型で栽培し、8月に定植して11~12月に収穫、9月に定植して1~2月に収穫、10月に定植し、3~5月に収穫する。一度収穫しても再度花をつけるため、8月定植分は5月中旬から、9月定植分は6月中旬から再度収穫する。8割以上はJAを通じた関東の市場への出荷だ。

今年、昨年中止になった結婚式や卒業式などのイベント再開で需要が徐々に回復し、売り上げは改善傾向だという。

トルコギキョウは光の要求量が多く、曇天が3日程度続くとか花芽が枯死することがある。遠藤さんは、天候不良の日は、白熱灯より強い光を放つ400ワットの高圧ナトリウムランプを利用し、花芽の枯死を防ぐ。「費用がかかるの

保温と加温組み合わせ コスト削減



70歳までには長男(左)に継承する予定だという

で、天気が悪いときなどに日中に限って使っている。使わない場合よりも出荷量は上がっている」と笑顔だ。

高圧ナトリウムランプのため、冬場でも花芽分化が促進できるよう、日中と合わせて20時間明るくなるよう電照栽培し、温度は10度から20度の間で変温管理する。コスト削減のため、主にヒートポンプで保温し、温度を上げきれない場合は、重油ボイラーで加温する。「燃料代より電気代の方が安いので、かなりコストを

経営支えた収入保険

近年は安定して経営していた遠藤さんだが、昨年は新型コロナウイルスの影響で3月から4月にかけてイベントな

どが中止になり、市場価格が平年より2~3割程度低下し、収入は一昨年比べて約300万円減少した。「東日本大震災のときも、自粛でイベントなどが中止になり、収入が減少した。当時の教訓から収入保険に加入していた」と話す。今年の3月に保険金を受け取り、経営を継続した。

園芸施設共済にも加入

「花きは販売が景気に左右されるうえ、近年は台風で毎年各地で被害が出ている。収入保険だけでなく、園芸施設共済にも加入して備えている」と遠藤さん。

静岡市と同市を管内とするJA静岡市、JAしみずは、NOSAI静岡(静岡県農業共済組合)と「農業経営収入保険の普及及び加入の促進に係る連携に関する協定」を締結。市内の認定農業者や近い将来認定農業者を目指す農業者を対象に、2021年を補償期間とする収入保険加入者

NOSAI静岡の佐藤宏司参事は「遠藤さんは後継者もしっかりとおり、自然災害や景気動向も常に気にかけている。この収入保険が農業版BCP(事業継続計画)の一助となればと考える。経営努力では避けられない収入減少に対応できる収入保険を職員一丸となってさらに普及していきたい」と話す。